
血に穢れぬ白い綿

元素猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血に穢れぬ白い綿

【Nコード】

N9264X

【作者名】

元素猫

【あらすじ】

晴れることのない暗雲が空を覆う世界。殺戮を楽しむアルマーナフは、呪いを受けて隔離された人々と出会い、失った心を取り戻して行く。

第一話 獣くケモノ>

大地を覆うように点在する橙色の光は、人々の営みを示す街の明かりだった。人々は息をひそめ、小さな炎の明かりだけが救いのように、ゆらめきを凝視し、手をかざして暖を取りながら長い夜を過ごす。

カーテンの隙間から覗くその姿は、見る者に畏怖嫌厭いふけんえんの情をいだかせる。ゆえに彼らは、表に出ることを好まなかった。

闇の中で行く手を遮るようにそびえるエルハー山の頂、それ自体が発光しているかのように真つ赤な幹を不気味に浮き上がらせた呪木ほくは、支配者のように暗雲の冠をいたたく。弾幕のように厚い雲は昼夜を問わず空を隠し、昼間でも嵐の前のような薄暗さだった。その巨大な木がいつからあるのか知るものはないが、空の暗雲が晴れないのは呪木のせいだと信じられている。

「アルマーナフ」

名前を呼ばれて、黒髪の精悍な男は窓から室内に視線を移動させた。そこには、目を覆いたくなるような凄惨な光景が広がっている。癩癩かんしゃくを起こした子供が、人形を滅茶苦茶に壊してしまっただかのような、野のケモノですらもう少し上品だろうと思えるほど、無残に刻まれた人体の部位が散らばっていた。それはどこか、滑稽にすら思える光景だった。

そんな中で、金髪を無造作に伸ばした男が、壮齡の男の、頭髪の薄い頭に銃口を押しつけていた。窓際で外を眺めていた彼　　アルマーナフを呼んだのは、その金髪の男のようだ。

「こいつ、どうするよ？」

金髪の男が尋ねると、アルマーナフは刃渡り三十センチほどの刀をプラプラさせながら、楽しそうに笑った。

彼は殺戮さつりくが好きだった。金を奪うのは二の次で、欲しいのは貴族たちが見せる醜い生の執着心だ。いつもは貧乏人を蔑むような目で

見る連中が、泣きながら命乞いをし、命令せずとも彼の足にしがみついて靴にキスをする。媚びる眼差しでアルマーナフを見上げ、自分の妻や娘を躊躇なく差し出す者までいた。

アルマーナフはそんな貴族の惨めな姿を見るのが、楽しくて仕方がなかったのだ。取り繕った幸福をはぎ取り、醜い真実をさらけ出す。それこそが、彼の喜びだった。

「俺は金目のものを探してくるぜ」

金髪の男が肩をすくめて部屋を出てゆくと同時に、眉をひそめたくなるような断末魔の叫びが響いた。

貴族たちの屋敷が並ぶ中心部を抜けて、小さな民家が軒を並べる区画の先には、エルハー山へと続く広大な森林が広がっていた。そこはかつて、まだ世界に青空があった頃に狩猟場として多くの人々が入り出す所で、貴族の別荘も湖の周辺に建ち並んでいた。

現在そこは収容所のような高い塀に囲まれて、近づくものはない。この塀が造られたのは、もう百年近く前、最初の部隊が呪木の伐採に失敗してから一年ほど後のことだ。

青空を奪った憎き呪木を切り倒そうと、意気揚々、若き兵士たちがエルハー山の頂に向かったが、部隊はほぼ全滅で、生き残って街に戻った者もまもなく息を引き取った。そればかりでなく、部隊に参加した兵士の家族や恋人まで後を追うように、命を失ったのである。

彼らのその、あまりに不可解で恐ろしい最後に、人々は呪木の呪いだと噂した。呪木という呼び名は、その頃に付けられたものである。

以後、数度に及ぶ部隊の投入で、いくつかがことが判明した。まず、呪木を切ると、自身の体に切られる痛みが伴うということ。そして、呪いは木を傷つけた者と、その人物が心から大切に思う者に及び、命を奪うということだった。

それらが判明してからは、呪木を切ろうと考えるものはなく、長い時間だけが陰鬱いんうつと過ぎていったのである。

ところが一年前、ある貴族が志願者を募って部隊を編成、呪木の伐採に向かったのだ。結果は今までと同じ、部隊は全滅し、残された家族たちが呪いに侵された。しかし今までと異なつたのは、「呪いが伝染する」という風評が流れたことだった。最初は嫌がらせに始まり、やがて暴動にまで発展しかけた騒動を収める方法はただ一つしかない。

この時点でまだ生きていた家族たちは、本来立ち入りを禁じるために造られた塀の向こうに、隔離された。

アルマーナフは、高い塀を見上げていた。この塀は、夢と現実を隔てるものだ……彼はそう思う。善を成そうとした者が、悪を成さない者に追われたのだ。その言葉以上に、両者の違いは大きい。

「遅いぞ、ロード」

近づく足音に、振り向きもせずアルマーナフは言った。金髪の男は苦笑する。

「悪い。警邏隊けいらたいの様子を探ってたんだ」

「ここには来ないさ」

二人は塀に付けられた、高さ一メートルにも満たない鉄の扉を開けて中に入る。この扉は非常口として造られたものだが、呪われた家族を隔離した時に開けられないよう嚴重に施錠された。それを解錠し、自分たちだけが使えるように鍵を付け替えたのがアルマーナフだった。

この塀の中までは、警邏隊も追っては来られない。呪いを恐れて近づく者もないため、彼らが隠れるにはうつつの場所なのだ。

エルハー山の麓に近い湖周辺は、別荘を利用して隔離された人々が生活している。二人はそこは反対の、森の奥にある洞窟で暮らしていた。

アルマーナフは川で汲んできた水で返り血を洗い流し、ロアードは盗んできた金貨を数える。ほとんど会話もなく、それぞれ思い思いに過ごし、やがて明け方近くに眠る。お互い、名前以外のことは知らないし、知ろうとも思わなかった。

静かな寝息だけが聞こえる中、ロアードがむくりと起き出した。小さくなった焚き火の炎を挟んで眠る、アルマーナフを見る。背中を向けている彼に、ロアードは足を忍ばせて近寄った。途中、壁に掛けてあった銃を取る。

銃口は心臓を狙い、ロアードは引き金を引いた。瞬間、眠っていたはずのアルマーナフは地面を転がり、側に置いていた刀を手にする。二発目の銃弾は肩をかすめ、足払いでよろめいたロアードが放った三発目は、飛びかかろうとしたアルマーナフの右太ももを貫く。倒れたロアードに馬乗りになったアルマーナフは、彼の銃を持つ右手を切断し、そのまま刀を喉元に添えた。

「何が目的だ？」
アルマーナフが尋ねると、痛みに顔を歪めながらロアードは答えた。

「取引をした。警邏隊は、お前の首がどうしても欲しいらしい……」
「そうか。だが、残念だ」

彼が刀を持つ手に力を込めようとした瞬間、ロアードは左手に仕込んだナイフをアルマーナフの右腕に突き立てた。

「お前も終わりだ」

一瞬身を引いたアルマーナフは、その言葉が終わると同時に彼の喉を切り裂いた。吹き出す血を顔に浴びながら、ゆっくりと立ち上がるアルマーナフは、しかし急に足下をふらつかせて、壁に手を付いて体を支えた。

「くそつ、毒か」

よろめきながら洞窟を出たアルマーナフは、霞む視界の中を進んで行く。夜が明けたとはいえ、森の中ということもあり夜のように暗い。意識も朦朧とし始め、勝手に動く足に、自分が何処へ進んで

いるのかもわからなかった。

第二話 霞くカスミ

輪郭を失った世界は色を滲ませ、朦朧もろうとしたアルマーナフの意識の中で揺らめいていた。張り付いたように握られた刀はそのまま、枯葉を踏んでどれほど歩いただろうか。蛍のような光が残像を引きずって視界を横切り、彼は導かれるように体を倒した。堆積した腐葉土に身を横たえ、瞼まぶたが重く垂れ下がる。

現実感が喪失する中で、アルマーナフは泣きじゃくる幼い自分の姿を見た。あんな風に感情を溢れさせたのは、いつの頃だろうか……浮かんだ疑問は、すぐに気怠さに消えた。

しかし、彼の本能に近い部分が人の気配を察した瞬間、獲物を捕るバネ仕掛けのように、アルマーナフの体は動いた。彼に触れようとしたその人物の胸ぐらを掴み、刀を喉元に押し当てる。

柔らかな、甘い匂いに、一瞬、彼は怯んだ。

「何も、しませんよ」

諭すような口調の優しいその人物は、長い髪を束ねた若い女性だった。吸い込まれそうな漆黒の瞳に見つめられ、アルマーナフは魔法でも掛けられたように刀を降ろし、そのまま、意識を失った。

肩を軽く揺すられて、サリアは目を覚ました。

「もうすぐ朝食の時間ですよ」

目をこすりながら顔を上げたサリアを、白髪の老齢な男性が柔らかな表情で見下ろしていた。彼女ははにかみ、薄紅色に染まった顔を隠すように視線をベッドに向ける。

部屋の半分近い面積を占めるベッドには、アルマーナフが静かな寝息を立てて横たわっていた。

「呼吸も穏やかになってきました。もう、大丈夫でしょうか？」

男性は頷き、ベッド脇の椅子から立ち上がったサリアと入れ替わ

るように腰掛け、アルマーナフの額に手を当てた。

「……熱もないようですし、毒の方は問題ないでしょう。足の怪我も、数日で癒えると思いますよ。目を覚ましたら何か食べさせた方が良いでしょうね」

「わかりました、神父様」

軽く頭を下げたサリアは部屋を出ると、洗面所に向かった。そこは床板が張られておらず地面がむき出しで、専用の井戸がある。彼女は用を足し、手押しポンプで木桶に水を貯めると顔を洗った。棚に置いて置いてあったタオルで顔を拭き、端が欠けた鏡を見ながら長い髪を束ねつつ自分の顔を一通り確認して頷くと洗面所を後にした。

廊下を進んで小さな礼拝堂に行き、そこにある羽衣をまとった神像の前で膝を付き祈りを捧げる。数分ほどそうしてから、サリアは外に出た。空にはいつもの灰色の雲が重くぶら下がり、さわやかな朝というわけにはいかなかった。

彼女が出てきたのは、湖畔に建つ小さな教会だ。木々に囲まれたこの周辺に、他の建物はない。曲がりくねった小道を進むと、拓ひらけた場所に出る。元は貴族の別荘地だけあって、建ち並ぶ建物は豪華だ。

サリアが来た道から扇状に広場があり、中央には水の出ない噴水があった。その噴水に登って遊んでいた子供たちが彼女の姿を見つけて、走り寄って来る。

「サリアお姉ちゃん！」

両手を広げて元気に抱きついてきたのは、五歳の少女エリーナと三歳の妹ラナだ。

「おはよう、サリアお姉ちゃん！」

「はよ〜」

無邪気な笑顔でサリアを見上げて、姉妹は朝のあいさつをする。彼女は二人の頭を優しく撫でながら、

「おはよう、エリーナ、ラナ」

そして姉妹の後ろでニツと笑っている少年に視線を向けた。

「エルリッドもおはよう」

「おはよう。夕べも教会に泊まったんだな」

少年が言うと、少しだけ不安そうな顔でエリーナが尋ねた。

「死んじやうの？」

「バカだな！ だから神父様やお姉ちゃんが看病してるんだろ！」

怒ったようにエルリッドが声を上げると、エリーナは頬を膨らませた。

「バカじゃないもん！ 心配なだけだもん！」

この二人の口喧嘩はいつものことで、些細なことで言い合いになるが、仲直りも早かった。サリアは慈愛の目で二人を見つめ、小さな頭に手を置いて優しく言う。

「大丈夫よ。すぐに元気になるから」

その時、服を引つ張られ、サリアは視線をさらに落とした。ラナが彼女にスカートをぎゅっと握って小さく首を傾げている。

「ポンポも、元気？」

舌足らずな口調でラナが言うと、サリアはしゃがみこんで愛おしくて仕方がないようにぎゅっと彼女を抱きしめた。少女の言う『ポンポ』とはタンポポのことだ。

「うん。もうお怪我也治って、小さな体を懸命に伸ばそうとしているわよ。後で、植え替えてあげましょうね」

「何の話だよ？」

不思議そうなエルリッドに、バカ呼ばわりされた仕返しとばかりに、エリーナはクスクスと笑った。

「女のヒミツよ」

胸を反らせるエリーナに、今度はエルリッドが頬を膨らませた。

サリアは笑って、

「後でちゃんと教えてあげる」

そう言い、手を振って自宅に戻った。

彼女の自宅は、広場から少し入った離れた所にある。白く、大き

な別荘だ。ここにサリアは、母のフィオーネと二人で住んでいた。サリアはキッチンに行き、野菜スープとバターを塗ったパンをトレイに乗せて、二階の母の部屋に向かう。

「お母様？」

ドアをノックして呼びかけたが、返事はない。仕方なく、もう一度ノックしてからそつとドアを開けた。

フィオーネは窓辺の椅子に腰掛け、まるで魂が抜けてしまったかのように外を見ていた。疲れ切り、やつれた顔をしている。元気ならば美しい女性なのだろうが、サリアとは似ていなかった。

二人に血の繋がりは無い。フィオーネは後妻なのだ。サリアの本当の母は、彼女が幼い頃に病気で亡くなっている。しかしお互いにわだかまりはなく、かつては本当の母娘のように仲が良かったのだ。「お母様、朝食を持って来ました」

サリアが呼びかけるが、いらえはない。最近のフィオーネは突然怒り出すか、こうして抜け殻のように外を眺めているかだった。サリアは掛ける言葉が見つからないまま、そつと部屋を出た。自分の言葉が、母を苛つかせるのはわかっていた。

あの時、越えることの出来ない壁が二人の間に出来てしまったのである。

「お父様……どうして……」

常に優しく、明るい笑顔を浮かべていたサリアの顔が、苦しげに歪んだ。

子供の泣く声が聞こえた。耳障りなその声に、アルマーナフは苛立った。けれど視界は闇に閉ざされ、その声がどこから聞こえるのかもよくわからない。耳に集る蚊のように、ただ、鬱陶しく思えた。いったい何を泣いているのか、親は何をしているのか……そう考えたとたん、アルマーナフはその子供が自分だと気付いた。親が死んだから泣いているのだ。

ようやく歩けるようになったばかりの、幼い彼の膝丈くらいまで草が伸びた、何も無い原っぱだった。鳥肌が立つほどの気温の中、アルマーナフは何も身につけていない。

人間として大切なものを、すべて失ってしまった。震え、身を抱えてうずくまる彼を助けるものはない。

アルマーナフは、一人で生きようと決めた。一人で生き、そして奪おう。渇く喉を潤すように、渴望する怨念を満たすべく、呪われた世界ですべてを奪おう。

人の心を捨て、幼いアルマーナフは歩き出した。

第三話 醒くサメル>

肌を刺す冷気で気がつかなかったが、ふと見ると、アルマーナフ少年の全身は小さな切り傷が無数にあった。特にひどいのは、膝から下の辺りである。それまでわからなかったが、傷があることを知ると、とたんに痛み出した。ひとつひとつの傷が存在を誇示するように、チクチクとアルマーナフを刺激する。

なんだかとても悲しくなって、アルマーナフは歩くのを止めた。もちろんずっと悲しかったのだが、抑えきれない感情が涙になって溢れ出す。声を殺し、うずくまって、小さな体を震わせた。

どうして世界はこれほど、絶望に満ちているのだろうか。少年の小さな胸は押し潰され、目に映るすべてが憎悪の対象だった。でも、何かが優しく彼の頭を撫でる気がした。それは母の手に似ている。

生まれる前の姿のように膝を抱え、アルマーナフは温もりに心をゆだねた。こんな想いは、とても久しぶりだった。

ゆるゆるとぬるま湯の中で身をよじるように寝返りをうつアルマーナフは、鼻から吸い込んだ冷たい空気に追いついて立てられるように瞼を上げる。誰も座っていない椅子が見え、天井から吊されたランプのオレンジ色の明かりで、床に出来た影が揺れていた。ぼんやりとした頭を押さえながら、アルマーナフは上半身を起こす。

部屋の中を見渡すが、見覚えはない。時々痛む頭を働かせ、彼は自分の身に起こった出来事を思い出していた。ふと向けた視線の先には、テーブルの上に乗った刃渡り三十センチもの刀があった。

鮮明に蘇る光景は、手に残る生々しい感触をも蘇らせた。人を殺すことには馴れている。何度も感じた、痺れるような感覚だ。渴く気持ちを満たすように、次から次へと屍を築いてきた。それなのに、今はとても気持ちが悪い。ひどくはなかつたが、チリチリと胃液が

込み上げるのがわかる。口の中が、渴いていた。

水が飲みたい。アルマーナフはベッドから降りて、まだおぼつかない足取りでドアに取り付く。人の気配はない。ここが何処なのかは、察しが付いていた。塀の外でないなら、考えられる場所は一つしかない。

体重を掛けながらドアを開け、左右へ続く廊下を覗く。裸足で、足音を立てないように壁伝いで右側に進む。すぐに土間の洗面所に出て、すがりつくように井戸へ駆け寄り、座り込んだ。釣瓶を落とし、腕の力だけで縄を引く。普通なら何でもない作業が、思うように動かない体のせいで異常に重く感じられた。

時間を掛け、ようやく水を蓄えた釣瓶を持ち上げて、アルマーナフは直接口を付けて服が濡れるのも気にせず、喉を鳴らして水を飲んだ。文字通り浴びるように水を飲み干した彼は、しばらくぐったりとしたまま動かない。

時間の感覚がすっかり麻痺しているようで、どれほどそうしていたのかもわからない。アルマーナフはゼンマイを巻き忘れたおもちゃのように、ぎこちない動作で立ち上がると壁に手をついて、来たときのように歩いてゆく。しかし部屋の前は通り過ぎて、光が差す方へ向かう。

物音が聞こえた。誰かが居るようだ。警戒しながらそっと覗くとそこは礼拝堂のようだった。白髪の老齢な男性が神像を磨いているのが見えた。外へ出るのは、礼拝堂を抜けるしかない。脳裏に、目を覚ました部屋の刀がよぎる。助けてくれたからといって自分に敵意がないとは言い切れない。刀を取りに戻ろうか、逡巡する。

白髪の老齢な男性は、そんなアルマーナフの思いに気付いたわけでもないだろうが、礼拝堂の奥の部屋に入ってしまった。ガタガタと大きな物を動かすような音が聞こえる。

アルマーナフは音が聞こえる暗闇の方へ視線を向けたまま、出来るだけ素早く出口のドアまで移動すると、ドアをわずかだけ開き、隙間から外を確認して身を滑りこませた。

建物の中よりも数度低い空気に、アルマーナフは体を震わせる。それまで気にしていなかったが、着替えさせられた寝間着は生地が薄い上に、さきほど濡らしてしまったのだ。一瞬迷った彼は、道なりに歩き出す。おぼつかなかった足取りも、徐々にしつかりと大地を踏みしめるようになった。

やがて、木々の間から豪華な建物の姿が見え始め、葉の擦れる音に混じって子供の声が聞こえてきた。塀の内側に閉じこめられた呪われし人々。彼らの存在は知っているが、どれほどの人数が残っているのかは知らない。ただ、志願者の家族や恋人ということで、女子供がほとんどだと聞いている。大人の男がいても、さきほどのような老人くらいだろうとアルマーナフは思った。

幹に身を隠し、様子を伺う。拓けた場所は広場になっているらしく、中央に噴水が見えた。噴水はずいぶん長いこと水を吹き出していないのが、遠目で見てもすぐにわかった。その噴水の周りで、子供が遊んでいる。数は三人。大人の姿は少し離れた所に二人見えた。籠を持って立ち話をする女性たちだ。

二人の女性は、時々、子供の方へ視線を送っている。アルマーナフはあの二人が、噴水の所で遊んでいる子供たちの母親だと直感した。一人はほつそりとした、まだかなり若い感じの女性だ。もう一人は浅黒く小太りでがっしりとした、母親然とした女性である。

他に人の姿はない。アルマーナフは、ぼんやりとその光景を眺めた。どうしてか、胸が痛かった。吐き気とは違う、別の気持ち悪さがある。込み上げる衝動が、拳を震わせた。

破壊、殺戮……彼が貴族に対して感じている憎悪の矛先が、目前の親子に向けられていた。自分の意志とは関係なく呪われ、隔離された哀れな人々を、アルマーナフは消し去りたいと願ってしまった。そんな自分の想いに、本人が一番戸惑っていた。

(それは違う)

彼は、何でも自分の思い通りになると信じている、傲慢な貴族が憎かった。父や母を、暇つぶしに殺し、彼から人間としてのすべて

を奪った貴族こそが、憎むべき世界の象徴だったはずだ。貧しい人々は愚かであったが、だからこそ彼にとっては殺す価値など無い存在だった。

頭が痛かった。腕が、足が痛かった。立っているのが辛い。軽いめまいによるめいたアルマーナフは、なんとか体を幹で支えた。落とした視線が、その姿を捉える。

幼い、女の子だった。彼は知らなかったが、その子はラナだった。ラナは無垢な瞳で彼を見上げ、少しだけ首を傾いだ。見れば、他の二人の子供と母親らしい女性たちも、彼の存在に気付いていた。

内心で舌打ちをしたアルマーナフは、溢れる衝動にすべてを委ねてしまおうかと考えた。手を伸ばせば、ラナを抱き上げることが出来る。素手でも命を奪うのは容易い。

母親たちの目に映る恐怖が、いつもなら心地好いはずだった。命を奪うのが楽しいのだ。しかし、ラナの澄んだ瞳に映る自分の姿は、どうしてそんなに悲しそうなのか。

不意に、ラナが彼の寝間着のズボンを掴んだ。

「だいじょうぶ？」

どうして、この少女は逃げないのだろうか。だいじょうぶ？ どうしてそんなことを聞くのか。アルマーナフは手を伸ばす。空気が張りつめるのがわかった。そっとラナの頭に手を乗せ、彼は笑おうとした。でも、笑えなかった。

悲しかった。膝が折れ、アルマーナフはその場に倒れた。

無様な姿を見せるのは嫌だった。けれど、涙を見せるよりはマシかも知れない。そう思い直して、アルマーナフは濁流のような意識に身を任せた。

とても、お腹が空いていた。

第四話 父<フセイ>

皆から『神父様』と呼ばれている、白髪の老齡な男性はオルネアと名乗った。

「何かに夢中になると、周りが見えなくなってしまうんですよ。いつ出て行かれたのか、まったく気付きませんでした」

「恥ずかしそうにそう言い、アルマーナフに肩を貸してベッドまで運んだ。彼が出て行くと、入れ替わって長い髪を束ねた女性がやって来た。服装は安物のシャツにスカートという、街中でよく見る格好だったが、大きな目には凜とした強い意志を宿し、柔らかく笑みを浮かべる口元には品を感じられた。アルマーナフがこれまで出会った多くの貴族よりも、ずっと貴族らしい気がした。だが、嫌な感じはしない。彼女は、サリアと名乗った。」

アルマーナフは彼女が運んだ野菜スープを飲みながら、助けられた時のことを聞いた。

「タンポポを探しに、森の方へ足を運んだんです」

「どうしてタンポポを探しているのか尋ねると、サリアは慈しむように目を細める。「どんな環境でも負けない強さを持っているのに、控えめな小さく黄色い花を咲かせるところが好きなんです」と、嬉しそうに話した。子供たちに見せたいと思って朝早くから、いつもは近付かない森の奥に向かった。そこで、怪我をして倒れているアルマーナフを見つけたのだ。」

彼が平和的な人物ではないのは、出会ってすぐにわかった。殺されかけたサリアは笑ったが、アルマーナフには記憶がない。

すぐに神父　オルネアが呼ばれて、二人で彼を教会のこの部屋に運んだのだという。その後、洞窟で別の男性の遺体も発見したが、サリアは何があったのか追求することもなく、淡々とその事実だけを告げた。

「聞かないのか？」

彼が尋ねてみると、サリアは首を振った。

「私は警邏隊けいちうたいじゃないから。それに知ったとしても、どうすることも出来ない」

起こってしまった出来事は、ただ事実としてそこにあるだけだ。

ここに隔離された時、サリアは知ったのだという。「なぜ？」、「どうして？」という追求は、自身を追いつめるだけだ。

限られた命だからこそ、笑っていたかった。

走り回りながらはしゃいだ声を上げる子供たちを窓越しに眺めながら、メリルとコルダはオルネアを交えて朝食を取っていた。メリルは幼い姉妹エリーナとラナの母親で、コルダはやんちゃな少年エリッドの母親だった。

今ここに居るのは彼女たち親子に神父オルネア、そしてサリア親子のわずか八名ばかりである。

メリルは三十歳だったが外見は若く、娘たちと歩いていても年の離れた姉妹と思われるほど童顔だった。コルダの方は三十五歳で少し小太りの、貫禄があつていかにも母親然としていた。

「サリアちゃん一人で、大丈夫かしら？」

心配そうにメリルが言うと、同意するようにコルダが頷く。

「子供たちは『悪い人じゃない』なんて言っているけどさ、何か言えないようなことでもなければ、わざわざ塀のこっちに住んだりはしないだろう？」

オルネアやサリアは、アルマーナフを発見した経緯などを大雑把にしか説明していない。余計な不安を与えたくはないという理由で、洞窟で発見された遺体のことなども伏せていた。だがそれでも、普通に考えれば察しが付く。

「彼がまあ、法律を遵守じゆんしゆする人物でないのは確かですが、『悪い人』かどうかは判断できません。善か悪かで言うなら、きっと私たちも同じなのかも知れませんか」

その言葉に、メリルとコルダは顔を見合わせた。その目に映る痛みは、ここにいるすべての人が背負わなければならぬ痛みだった。「それに子供というのは、とても素直にその人物を見ることが出来ます。だから彼らの言う言葉は、正しいものだ」と私は思いますよ」場の空気を和ませるように、オルネアは笑った。硬かった二人の表情も、ほっとしたように和らいだ。

食事を終え、メリルとコルダは談笑しながら後片付けをしていた。その様子を眺めていたオルネアは、不思議な想いに駆られる。

皆から『神父様』と呼ばれているが、彼は本当の神父ではない。塀の外にいた頃は、行商を営んでいた。街でしか手に入らないものを田舎で売り、山の幸を漁村へ、海の幸を農村へ運ぶ。彼が扱うものは粗末なものが多かったが、その分、価格を抑えることで貧しい人々からは重宝がられていた。

妻と息子に会えるのは、年に一度、時には数年もの間旅をしていることもあった。だから妻が亡くなったことを、彼はずっと知らずにいた。誰もいない家に帰った時に、近所の人から聞かされたのである。

息子は姿を消した。父を恨み、家を出たのだ。オルネアは仕方がないと思った。何もしてあげられなかった自分を、何度も責めた。気を紛らわせるように、これまで以上に働いた。

胸が締め付けられるような痛みに襲われたのは、それからしばらくしてからだった。言葉に出来ない悲しみに、涙が溢れた。それが『呪われた瞬間』だと知ったのは、ここに隔離された後だった。ここに集められた人々は皆、同じような体験をしていたのである。

絶望の声の中で、オルネアは喜びの涙を流した。父を恨み家を出た息子の本心が、『呪い』となって自分を襲ったのだ。心から大切に思う者にだけ及ぶ呪いである。

これは父親として何も出来なかった自分への罰であり、父親とし

て息子の為にしてやれる唯一のことでもあった。

多くの者が次々に亡くなり、次は自分ではないかという恐怖の日々は確かに辛いものであった。しかし、塀の外ではなかった落ち着き、安らかな日々がここにはあったのである。

メリルとコルダの笑い声に、オルネアは優しく目を細めた。外では子供たちの元気な声が響き、緩やかな時間が平和に過ぎていた。

しかし、突き刺すようなガラスの割れる音がそれを壊す。

「神父様！」

悲鳴のような声は、メリルだ。オルネアは慌てて立ち上がる。彼女の側で、コルダが倒れていたのだ。コルダは白目を剥き、力なく開いた口からはだらしなく舌が覗き、痙攣けいれんしていた。

「発作が……まさか薬を」

オルネアはメリルを見たが、彼女はわからないというように首を振った。

「ともかくベッドに運びましょう」

二人は両側からコルダを抱えて、彼女の部屋まで運んだ。ベッドに寝かせ、すぐさまメリルが部屋を飛び出して行く。オルネアは部屋の中を見渡し、棚の小さな引き出しを開けた。その中から銀色の四角い缶を取り出し、入れられた薬包を確認する。

「やはり飲んではいなかったのですね」

唇を噛み、缶を戻そうとしたその時、突然コルダがオルネアの首に腕を絡めてきた。

「ぐっ……コルダ！」

彼女の目には、理性の光が無かった。それは獣の目だ。低く唸り、歯を剥いて涎よだれを垂れ流している。恐ろしいほどの力で、オルネアの首を絞めていた。引き剥がそうとするが、彼一人の力では無理だった。

そこへ、拘束具を持って戻ったメリルが、慌ててコルダに取り付いた。羽交い締めにして、オルネアから離そうとする。しかし二人の力でも、コルダを押さえることが出来ない。「助けを……」そう

メリルが言いかけた時、不意にコルダの全身が弛緩^{しかん}した。

倒れたコルダの横でオルネアが咳き込みながら、不安の色を浮かべた眼差しで彼女を見つめた。

第五話 孤くひとりゝ(前書き)

サブタイトルが思いつかない。
適当でごめんなさい。

第五話 孤<ヒトリ>

胸の奥で、何かガザワザワと騒いでいた。半分の不安と、半分の恐怖。こんな気持ちになったのは、あの時以来だろうか。アルマーナフは口の中に広がる野菜の甘みを不思議に思いながら、考えていた。

両親を失って何の支えもなかった自分が、あのどうしようもないざわめきに打ち勝つには、怒りの炎を灯すしかなかった。より強く鮮明な感情が、ぼやけたとらえどころのない感情を紛らわせる。それはただ、意識しないでいらただけにすぎない。今感じているざわめきは、あれからずっと続いていた感情なのではないか。まるで取り憑かれたかのようにまとわりつかせていた怒りは、アルマーナフの中から消えたように静かだった。強い光が消えて、ようやく見えるようになった弱い光。それが自分の中にあるものの正体なのかも知れない……アルマーナフはそう思った。

けれど別の自分が、それを否定する。何も知らぬ子供ではない。生きるための術を身につけ、常に自分こそが恐怖の対象だったはずだ。邪魔なものは力づくで排除して来たし、死ぬことも恐ろしいとは思わなかった。少なくとも、彼が殺してきた貴族たちのような醜態を晒す気はなかった。

不安も恐怖も、生まれるはずのない感情だ。ならば、このざわめきは何だろうか。

「……あの」

不意のサリアの声が、アルマーナフの意識を呼び戻す。彼は黙ったまま、顔を彼女に向けた。彼女は少し眉をひそめ、わずかに顔を傾いでから言った。

「あんまり、お口には合いませんか？」

「……いや、大丈夫だ」

面倒そうに答えた彼に、彼女は嬉しそうに笑った。

「よかった。何だか、難しい顔をしていたから」

突然だった。サリアのその顔を見た瞬間、アルマーナフは自分の中にあるものの正体を知った。このざわめきは、かつての残滓^{ざんし}ではない。

暖かなベッドの上で、まだ湯気の昇るスープを口に運ぶ。これほどのんびりと食事をすることは、今までで初めてだった。空腹を満たすだけの食事ではない。味わうことが、許される。仄かな明かりに照らされたサリアの顔は、柔らかく笑みを湛えていた。

これは、このざわめきは、居心地の悪さから来る孤独感だ。アルマーナフは思い知った。自分とはあまりにも違う世界で生きる人々、その中では、自分は孤独なのだ。まるで仲間はずれにされたような、嫌な気持ち。見放されたような、不安。入り交じった様々な想いが、彼の心を騒がせていた。

食事を止めたアルマーナフの手を、サリアが握った。驚いた彼がサリアを見ると、彼女は何だか悲しそうな顔をしていた。

「どうして、そんな顔をしている？」

「あなたがとても、悲しそうだったから」

アルマーナフは内心の動揺を隠すように、乱暴に手を振り払うと、再び食事を始めた。スープの甘みが、まるで心まで甘くしてしまつたような気がした。

「こそこそと話す声が、廊下から聞こえた。」

「やっぱり、邪魔なんじゃないかな」

「最初に来ようって言ったのは、お前だろう」

「だって、心配だったんだもん……あ、ラナ！」

ドアがゆっくりと開いて、幼いラナの顔がひょこつと現れた。

「ふふふ……いらっしやい、ラナ」

ラナはサリアの顔を見ると、ニパツと満面の笑顔を浮かべて走り寄り、彼女の足にぎゅっと抱きついた。サリアは目を細めて幼子の

小さな頭を優しく撫でながら、ドアの外でまだ躊躇ちゆうじゆしている二人にも声を掛けた。

「エリーナとエルリッドも、入ってらっしゃい」

気まずそうに笑いながら入ってきた二人は、正面のアルマーナフに視線を向ける。だがすぐに、エルリッドは少し不機嫌そうに、エリーナは恥ずかしそうに目をそらす。

「わざわざお見舞いに来てくれたのね」

サリアがそう言いながら、アルマーナフを見て笑った。彼は関心がなさそうに顔を背け、呟くように言う。

「俺みたいなお奴と二人きりだから、様子をみに来たただけだろう」

その言葉に他意はなかった。自分が他人にどう見られているかは理解している。危害を加えられるのではないかと、疑われた経験は数え切れない。相手のそうした反応にはもう慣れていたし、そのことで悲観することもなかった。だから、大きな声を上げたエリーナの反応に、アルマーナフは驚いた。

「違うの！ あの」

思わず出た声に、エリーナ自身が驚いて口をつぐむ。そして顔を真っ赤にしてうつむくと、もじもじとした。何かを言いたそうだったが、心にためらいがある。それを察したのか、不機嫌そうな顔でエルリッドが口を開いた。

「母ちゃんが言ってた。外の人間がわざわざ堀の中に来るのは、外には居られない悪さをしたからだって。俺たちだって、それくらいのことはわかるんだ」

「エルリッド！」

エリーナが慌てて少年の腕を引っ張るが、エルリッドは構わずに続けた。

「でも、本当にエリーナやラナはお姉ちゃんが心配で来たわけじゃない。二人が心配だったのは、お前だ。二人は……」

「サリアお姉ちゃん！ そういえばタンポポはどうしたの？」

かなり強引に話題を変えようとサリアに話を振るエリーナだった

が、振られたサリアは驚いて咄嗟とっさに言葉が出ない。すると沈黙を恐れるように、少女はサリアの手を取ると部屋の外へ引つ張った。

「ね、ね、タンポポの様子を見に行きましょう。ラナもおいで」

「あの、エリーナ。どうしたの？」

困惑気味の声とラナの笑う声が、部屋から遠ざかってゆく。後にはエルリッドと動けないアルマーナフだけが残された。相変わらず不機嫌そうな顔のエルリッドは、チラツと視線を廊下に向けたが、すぐにアルマーナフを正面から見据える。

「お前、人を殺したことがあるのか？」

好奇心で尋ねているわけではなさそうだった。眼差しは、真剣である。

「大勢……数え切れないほど殺した。それだけの人生だった」

「それはさ、頼まれたりしてなのか？」

「人に頼まれて殺しはしない」

「そうか……」

考え込むように、エルリッドは視線を落とした。

「殺して欲しい奴がいるのか？」

エルリッドは顔を上げ、黙ったままアルマーナフを見つめた。その目が、肯定している。しかし瞳で輝く光の中に、殺意は感じられなかった。憎悪ではない別の感情が、まだ六歳の少年の心にどんな変化をもたらしただのか。そしてその変化が、いかにして殺人の依頼という大事を決意させたのか。

深い闇の底を何度も覗いたアルマーナフも、少年の心に潜む闇の正体はわからなかった。

「誰を、殺せばいい？」

「……それは」

ためらいながらエルリッドが口を開いたとき、廊下から女性達の声が聞こえて来た。

「他にもあるか、探してみましょう」

「今度は私たちも一緒に行くからね」

「ええ」

笑いながら入ってきた三人に、エルリッドは何事もなかったように話しかけた。

「何の話だよ。どこか行くのか？」

「サリアお姉ちゃんと一緒にね、タンポポを探しに行くのよ」
「いくの？」

ラナも嬉しそうにそう言って笑った。何気ない風景。だが、アルマーナフが逸らした視線の先には、いびつな影が不気味に揺れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9264x/>

血に穢れぬ白い綿

2011年11月14日03時14分発行